病院建て替えで取り入れた外来でのフリーアドレス設計

医療法人辰川会 山陽病院
理事長
辰川匡史

要旨：当院は建て替えを行い、2016年3月より新病院による診療体制を開始している。外来の設計に際してフリーアドレスの概念を念頭に置いた。その時の知見が読者の参考になれば幸いである。

山陽病院の沿革

医療法人辰川会山陽病院（図1）は、広島県の東部に存在する福山市の市街中心部に位置している。筆者の父である前理事長辰川自光が1978年に透析専門クリニックとして開業した。その後事業展開を行い、現在は山陽病院（内科・外科・泌尿器科・整形外科の4科を標榜する82床（10：1）、地域包括ケア37床、一般病床42床）を中心としてサテライトクリニック2つを運営している。

図1　山陽病院外観

グループ全体で約380名の透析患者を担当しており、透析基幹施設として広島県東部地区随一の規模を誇る。2次救急輪番にも参画し、救急医療についても積極的である。また、包括支援センターを中心に地域密着型の特別養護老人ホームをはじめとする、小規模の介護事業所を近隣に多数持ち、地域密着型の医療介護を展開している。

建て替えのきっかけ

旧建屋は81年に竣工し、以来病院の発展に併せて増改築を繰り返してきた。現在の基準では耐震不適格であり、増改築の帰結として、不効率な動線となっており、患者満足はおろか、医療安全への影響さえ懸念されていた。一部の個室は採光がほとんど得られず、共用の患者のスペースも十分でなかった。

より快適に、安全に入院患者に過ごしていただくべく建て替えを決断したのは、2014年のことである。

周知の通り、東日本大震災と東京オリンピック開催決定の影響で建築費は高騰の一途をたどり、建て替えのタイミングとしては好機とはいえなかった。しかし、今後の医療事情と建築業界事情を詳察しても、待つことで好転する公算は乏しいと考えられた。企業体力のあるうちに大規模投資を行い、整備された病院設備を強みにして、地域の中で有利なポジションを取って18年、そして25年に備えようと考え、建て替えを実施した。

新病院のコンセプトと特徴

前述の通り、透析医療に関する限り、当院は広島県東部地区の透析基幹施設としての強い優位性を持っている。透析患者にとっての「駆け込み寺」という立場を、当院は今後も堅守していく。またシャント造設・表在化手術も行っており、シャント開存成績も良好であり、その意味でも地域医療への貢献度は大きい。しかし、今後の医療費縮小局面において、透析に過度に依存する体制は組織としてリスクをはらんでいる。

他方、地域に対しては「透析の病院」というイメージが強すぎ、また婉曲的ではあるが、当院の方でもフレンドリーな外来担当医を用意できなかったこともあり、閉じられているつもりもないのに、地域に広く門戸を開いているとはいえない状況であった。

当院の介護事業や認知症診療などの多角化のきっかけは、開院当初より利用された透析患者が「高齢化する・自宅で暮らせなくなる・認知症を合併する」など、旧来の診療体制では解決できない問題が起こったことが契機であった。

また2次救急レベルの病棟機能を有効に稼働していくためには、地域の中核である非透析患者に改めてアピールし、地域の多くの患者に使ってもらえる病院を目指すべきであると考えた。

とはいえ、高度な医療機器は病院の身の丈にはそぐわない。また中小規模病院の外来診療は、専門性では基幹病院に及ばず、接遇や個人的魅力でも独立心のある個人開業医に対

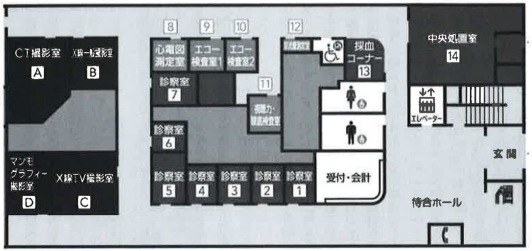

図2　院内のフリーアドレス設計

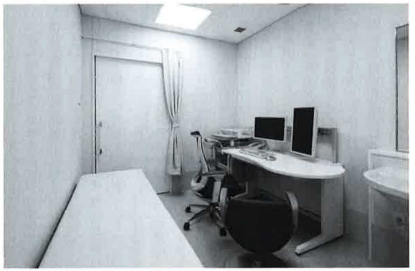

図3　外来診察室

図4　受付・会計